「親子」覚え書

内田　満

大正一二年五月、有島武郎が個人雑誌「泉」に発表した「親子」[1]は、彼の最後の小説になった。彼はその年、六月九日に死ぬ。六〇余枚のこの作品が「かんかん虫」から出発した作家有島の行き着くところとなったわけだが、それは彼の終焉作というにとどまらず、父と農場という、その帰朝後（農場についてはおそらく明治四一年なかばから）死に至るまでの重いくびきを題材とした唯一の小説でもあった。小稿では、この作品を概観して問題点を拾い、その背景と内実を考えることにしたい。

*

「親子」は、主人公の「彼れ」（以下「彼」と書く）が父に従って農場に向かう車中の場面から始まる。彼の目に映る車窓の眺めは、「水々しくふくらみ、はつきりした輪郭を描いて白く光るあの夏の雲」がすでに姿を消し、「薄濁つて形のくづれた」雲ばかりが見やられる荒涼としたものに変っていた。「年の老いつゝあるのが明らかに思ひ知られた」という一文は、季節の老いに重ねて父の老いを伝え、また同時に作者自身の生命力の衰えをもさらけ出していて、「この作品の性格を象徴」[2]するものとなっている。またこの季節設定と自然描写は、作品の結びにあらわれる自然描写を読みとくカギにもなるはずである。

車中の点描から書き起こされたこの作品は、農場に着いた夕刻から夜半までの前半と、翌日の朝から深更に至る後半から成る。父が彼を伴ってマッカリヌプリの麓に広がるこの農場を訪れたのは、矢部という土木業者に請負わせていた開墾がようやく完了したので場主としてそれを検分し、授受の交渉を済ませるためであった。

父と子の互いにそぐわぬ気持は車中の点描に早くも顔をのぞかせ、

監督と数名の小作人たちの出迎えを受けて事務所へ向かう道中、また事務所に着いて夕食を始めるまで、そして夜半まで監督に帳簿の説明をさせる間、さらに監督を下らせてから就寝までの間と、事あるごとにこじれかかる。彼の目に映る父の姿は、「負けじ魂」の強い、相手に「白い歯は見せないぞといふ気持ちが、世故に慣れて引き締つた小さな顔に気味悪い程動いてゐ」る、「一心不乱」な、時に「悪意をさへ持ちかねない権幕を示」す、「しちくどい程」長々とした物言いをする、「丁度七十二になる」老人である。しかしそれにもかかわらず、彼には「さうした父の態度が理解出来」る。執拗に監督を問い詰める父の態度をも、「彼れは何故か不快に思ひながらも驚嘆せずにはゐられな」い。作中には、しばしば唐突なまでの父に対する「理解」が語られる。

二日目の矢部との交渉で、彼はあらためて「持ち前の熱心と粘り気とを武器にしてひた押しに押して行」く父の姿を見る。交渉は「最後の白兵戦」にさしかかった。夕食の時間も過ぎていたので「暫らくの休戦」がよかろうと思った彼がそれを父に勧めたところ父の「怒りは火の燃えついたやうに顔に出」て、「人前などを構つてはゐない父の性癖」からはげしく「きめつけ」られる。そのうえ、満足に計算もできないというのでいきなりその紙を「ひつたく」られ、「怒号」を浴びせられていたたまれなくなった彼はとうとうその席をとび出してしまった。

ところが、座敷を出て事務所の方に来た彼は、そこにいた小作人たちの態度が一変し「いやな不自然さが漲」るのに直面しなければならなかった。父に罵倒され、小作人たちに予期せぬ迎え方をされて、「不快な冷水を浴びた彼れは改めて不快な微温湯を見舞はれ」る思いである。小作人たちとの異和感、彼らに対する不快な思いは前日にも味わっている。監督に対して「暖かい心を持たずにはゐられなかつた」との対照的に、小作人たちに対する感情が「嫌悪」「不快」に終始しているのは注目すべき点である。主人公は「百姓」「農民」の立場を主張して父に抗うのであるが、作者はそれと「小作人」を使い分けているかに見える。

「何といふこともなく、父に対する反抗の気持ち」に駆られつづけた彼が、夕食の仕度が出来たからと呼ばれて座敷に戻ってみると、そこにはまた「何ともいへず気まづい空気」が漂っている。興奮した父に対してどこまでも落着きはらって交渉を進めていたはずの矢部が「一番小むづかしい顔になつてゐ」て、食事も宿泊の勧めも断ってそのまま帰ってしまう。ところが父の方はすっかり上機嫌で、先方を怒らせる策戦が成功して「五千円で農場全部がこちらのものになつた」、「これでこの農場の仕事は成功に終つたといつていゝ訳だ」と手放しに喜ぶ。

ここに至って、さすがの彼も父に抗弁せずにいられなくなった。彼は、開墾当初と「百姓の暮らし向きは同じ」でいっこうによくなっていないではないか、こんな状態で「農場としては一体どこが成功し」たと言えるのか、「農民をあんな惨めな状態におかねば利益のないものなら、農場といふ仕事はうそ」だ、と主張する。はじめは軽くうけ流すつもりであしらっていた父も、今夜の矢部に対する態度などは「丸でべてん」だと言い募られ、日ごろの彼からは想像もしなかった抗弁を受けて煙草に火が付かぬほど手を震わせて怒る。

しかししばらく経つと父はまた思い返したのか、あらためて諭すように「いやでも嘘をせにやならんのは人間の約束事なのだ。（中略）それともお前は俺の眼の前に嘘をせんでいゝ世の中を作つて見せてくれるか。」と切り返す。彼はその言葉を聞いて「興奮してゐた自分を後ろめたく見出」さざるを得なかった。彼ももちろん「嘘」のない世の中だとは思っていない。父と子を十重二十重に囲んでいる社会の「嘘」は知悉している。しかしなお彼は父に自分の「本質」を知ってもらいたいという気持から後に退かず、「遊んでゐて飯が食へると自由自在にそんな気持ちも起るだらうな」と皮肉を見舞われる。ここに来て、彼は「親子の関係がどんな釘に引かゝつてゐるかを垣間見たやうに」思い、「自分の本質のために父が甘んじて衣食を給してくれてゐるとの信頼が、三十にも手のとゞく自分としては虫のよ過ぎる事だつたと省み」る。こうして、彼の方から打って出た大論戦は、つまるところ非力の自認という現実屈伏の形で終局することになった。西垣勤氏は父と子の二人を「理想のない現実と現実のない理想の対比」[3]ととらえているが、けだし適評であろう。

もはや、彼に対して対等の怒りをたたきつける必要のなくなった父は、「しんみりと独りごとのやうに」苦労してきた来し方を語り、また子どもたちの行く末を案じて農場経営をはじめたことを語る。また、金銭のことにかけては「人一倍」うといからこそこんなにまでしなければならないのだと弱々しく笑う。その父の姿には、矢部とわたり合っていた時のような策略もなく、また彼をやり込めようとした時のような気迫も感じられない。

「今の世の中では自分が転んだが最後、世間はふり向きもしないのだから…（中略）。『その義にあらざれば一介も受けず。その義にあらざれば一介も与へず』といふ言葉があるな。今の世の中で先づ嘘のないのはかうした生き方の外にはないらしいて。」

かう言つて父はぽつりと口をつぐんだ。彼れは何もいふことが出来なくなつてしまつた。「よしやり抜くぞ」といふ決意が鉄丸のやうに彼れの胸の底に沈むのを覚えた。不思議な感激――それは血のつながりからのみ来ると思はしい熱い、然し同時に淋しい感激が彼れの眼に涙をしぼり出さうとした。

これが「親子」の論争の結末である。ここに見える「よしやり抜くぞ」という決意――宣言の内実は、いったい何を「やり抜」こうというのであろうか。

西垣勤氏は、「これはもちろん、父が一介も与えない自己の仕事を、〈やり抜くぞ〉という決意であって、ここは以後の農場との関わりについての決意ではない」[④]とした。これに対して、「この作品の背景に作者がすでに農場を放棄した〈事実〉があって、それが大きくこの作品の裏打ちになっている」[⑤]とする高山亮二氏、山田昭夫[⑥]・外尾登志美[②と同じ]・福本彰[⑦]の諸氏らはこの言葉を農場解放を意味するものと解釈しておられて、それがむしろ定説の観を呈している。

私小説の方法で書かれたこの作品のような場合、作中に明記されていなくてもその作者について明らかなもろもろの事実を代入し、それを投影させながら作品を読むことはごく自然な鑑賞法であると言えよう。その意味からすれば、この決意を作者終生の懸案と結びつけて読むのはむしろ当然の手順と言える。しかしこの場面において、「よしやり抜くぞ」の箇所に「農場を投げ出」す決意を代入することは金輪際不可能なのではないか。父の述懐を聞いた彼はもう「何もいふことが出来なくなってしまった」のである。父の言葉に耳を傾けた彼が、ほとんど執着に近い父の努力の結晶、自分をはじめ子どもたちのためにとその人が築いた愛情の所産の放棄をことさら再確認する必要があるかどうか。この不毛な論争のあとになお農場解放(放棄)の決意を胸の中に畳みなおすというのは面従腹背、彼があれほど憎んだ「嘘」への逃避である。なおそれが「不思議な感激」、骨肉の愛情につながっていくと書かれたのであれば錯乱としか言いようがない。

作中から推しはかりうる決意の内実は、「父に養はれてゐ」る状況の克服、父がそうしたように自分もまたそれなりの自立を遂げねばならぬという、西垣氏のはじめの読みに近いものになる。ところが困ったことに、それはまたそれで別種の矛盾を引き起こすのである。それならば、父に激しく迫って行ったあの論理はどこへ雲隠れしたのか、という難点である(西垣氏が軌道修正を試みたのはそのためであろう)。作品のかなめとなる幕切れのせりふ、ここ一番の「宣言」の座わりの悪さにこの作品の「悲劇性」が露呈しているように思われる。

*

大正五年一一月八日、有島は父武が胃癌に冒されていることを知って動顛した。

本当のことをいうと、僕は心ゆくまで仕事をするために(良心にかけて、他のどんな目的のためでもない)、秘かに父上の死を

願っていた。でもこの重大な知らせを聞くと、父上の生命に対する僕の態度は完全に変ってしまった。父上の回復を心から願うのみ。神よ！余りにも残酷だ、残酷だ。（原文英語、小玉晃一氏訳）

同じ年の八月に妻を喪っていた有島はこの報せに呆然としている。動顛のあまり、書かでもの事を書いたともみえる。しかしこの一節には、彼がその父の存在を「心ゆくまで仕事をする」うえでのやり切れぬ障壁、あるいは重荷と感じていたことが明らさまに告白されている。この年有島はすでに三十八歳、三児の父である。何をそんなにまでこだわるのであろうか。山田昭夫氏はそれに触れて、「その父親コンプレックスは、父が文学嫌いの実業家肌の人であったので、溶け難いしこりであった」とし、それにしても「有島の心情は尋常でない」[8]と書いているが同感である。父に対する彼のコンプレックスは早く年少のころから「恐懼」として自覚されてきた。

余少ナルトキ父ニ侍シテ家ニアルノトキ常ニ父ヲ恐懼シ尊父ヲシテ此児為スナシト迄デノ給ハセタルコトアリキ。其後モ常ニ此レヲ矯メントスルノ心アリシモ遂ニヨクナス能ハズ。（日記・明治30・6・12）

時に有島十九歳であった。自筆と推測される年譜には、明治一五年の項に「父母からは最も厳格な武士風な庭訓を授けられた。暁晨の剣法、弓、乗馬、大学、論語。炙罰、禁錮。性格は非常にいぢけた」[9]と書き込んでいる。また「六つばかりの時」、父が来客と要談中に「父や客人を笑はせたり喜ばせたりする積りで、縁側で障子を隔てゝ踊りを跳り」、癇癪を起こした父に叢竹の根元に叩きつけられて「父を恨んだ」記憶のあることを書いている（「雑信一束　第七信」）。

こうした回想には、思い込みや思い入れの加わることもあろう。しかし、父の罹病を告げられた日の日記（前掲）、あるいは次のような日記文はなまなましい渦中のレポートである。

嗚呼何タル悪夢ゾ。（中略）我ガ心狂ヒシカ。抑モ我ノ父母ヲ慕（フ）ノ心足ラハヌカ。枕頭ヲ探レバ涕痕寒ク衾テ重ネテ涙更ラニ潸然タリキ。（日記・明治32・3・1）

この「悪夢」を上杉省和氏は「武郎が彼の父母を殺害するかした夢ではなかろうか」[10]と推測している。おそらくその通りであろう。上杉説に言及した山田昭夫氏は、「その真偽はともあれ（中略）、この〈悪夢〉が有島の暗い宿命観の始点であり、以後、父への批判・反抗をタブー化させるのである」、「この〈悪夢〉の経験は、有島の青春における〈家〉への敵対感情の否応のない自己確認であった」[14]としている。「秘かに父上の死を願」うに至る、潜在的な親殺しの想念を自覚した衝撃はただならぬものであったに違いない。

明治四〇年四月一一日、有島はアメリカ留学・ヨーロッパ巡遊を

終えて足かけ五年ぶりに帰国した。その日の日記に、彼はこう書いている。

ボーイがやって来て、波止場で父と直良が待っていると伝えた。本当に驚いた。そして小船を雇って岸へ急がせた。そこで二人に会い、無言のまましっかりと手を握った。父上！ああ、父上。歳月と境遇がそのもって生まれた性質を幾分変えたとは言え、あなたはこの地上で最も気高く純粋な人である。僕は父上を誇りとする。父上がなさったと同じように、気高く僕の進路を歩ましめ給え。（原文英語）

彼の「驚き」にわたくしは驚かされる。数年ぶりに帰国する長男を父が女婿とともに出迎える、それはごくあたりまえの情景であろう。横浜でなく神戸に入港したのだから、出迎えを予期していなかったものかと推測されるが、「本当に驚いた（I really was taken in surprise）…」という記述は、よく来て下さったという喜びよりも狼狽に近い印象を与える。そして握手。彼は再会した父の印象を「歳月と境遇がそのもって生まれた性質を幾分変えた（圏点部織田正信訳では「歪めた」、原文 crippled）ととらえている。しかもその父を「地上で最も純粋」、「誇りとする」と書く。ここに書きとめられた印象と心情もまた「尋常でない」のではないか。この「歪」んだ父の姿への批判（嫌悪）・畏怖・心服（心服願望）のパターンは作品「親子」の胞子かと見まがうばかりである。しかしどこまでも、これは有島の一つの側面である。彼は帰国後まもなく、アメリカでたびたび訪問したアヴォンデールのクロウェル夫妻にあてて次のように書いている。

（私は）父母を誇りに思っておりますし、心から愛しております。しかし、事実をありのまま申しますと、時代が、目まぐるしく変わっている日本にあっては、両親と小生とは、ほとんど異なる世界に住んでいると申し上げなくてはなりません。もし、問題（trouble）があるとすれば、この差異にその根拠があるわけでございます。[12]

その年八月、彼は父に伴われて狩太の農場を訪問した。残された手帳にもその旅行のかなり詳しい記録があって、鑓田研一氏以下多くの評家研究者は「『親子』はその時の経験を写し出したもの」[14]とみなしてきた。わたくしもその誤りを踏襲していた。しかしその後、高山亮二氏は農場関係の資料にもとづいて、この作品が「簡単な私小説でなく、明治四〇年夏の父との農場訪問と、同四二年秋の農場事務所での収支決算と、以後東京での父武と久慈との土地売買の取引きという、三つの素材を、四二年秋の清算の時点に三者が農場事務所で落ち合ったというフィクションのもとに作られた」作品であることを論証された。「親子」論の有力な礎石がここに定立された

わけである。

さらに高山氏は、「帰朝直後の武郎にとっての緊急切実な問題」としては「河野信子との結婚問題が最優先」であり、「未だ付与にもならない農場の処置などという事は、思想的批判の対象となっても父と子の深刻な対決となるには余りに緑遠い問題だった」[⑤と同じ]としている。この指摘も当を得たものだろう。有島帰朝後初の農場訪問が「親子」の素材に短絡された理由の一つは、この作品に先立って発表された「農場解放顚末」の一文とも関係している。

私自身にとつて親子の間に私有財産が存在するといふことが常に一つの圧迫として私にはたらいてゐました。明治四十年頃に私はこの農場を投げ出すことを言ひましたがそれは実行が困難でありそれに父に対して、たとひ(ママ)このことが父のためにも恩恵を与へることになるとは知つてゐましたが、徒らに悲しませることになると思つたのでともかく父の生きてゐる間は黙つてゐることにしたのでした。

年月を経た回想であるための不確実さ、談話筆記のために生じたと思われるあいまいさのまつわる一文であるが、有島がここで「明治四十年頃」と言ったのはいつのことなのか。また、「農場を投げ出すこと」はだれに対して言ったのか、「父に対して」の一句がここに入るのかとも思われるし、「父に対して」は「徒らに悲しませることになると思つたので」いっさい口にしなかった、とも取れる。ただ、いつのころからか「親子の間に私有財産が存在するといふこと」が「圧迫として」感じられるようになったというのは事実であろう。しかしその時期は明治四〇年ではあり得ない。[⑬] 高山氏の指摘にもあるように、その年最大の関心事、「圧迫」感の原因となったのは「兵営ニアル間ニ起リシ結婚ノ問題」(日記・明治41・1・21)にほかならない。河野信子との結婚は、身分が違うという理由で両親に反対され、「癒ス可ラザル深キ疵ヲ与ヘ」(同)られる結果に終わった。

翌四一年四月なかば、信子の結婚を知った有島は「傷負ヒタル猪ノ如ク、兎ニモ角ニモ現在己レガアル所ノ位置ヲ脱逸シテ他ニ至ラン」(日記・同4・17)として赤岩温泉に逃れ、傷心を癒すことにつとめている。帰札後、彼はピストルを買った(日記・同5・3)。失恋を悲観して死のうとしたのでなく、それを契機にあらためて父に対して自己主張を試みようとし、自らに向けて固い決意を迫る背水の陣の道具立てとして買ったものと推測される。このころ彼が父に書き送った書簡(日記・同5・8)は散佚したのか破棄されたのか、現在のところ不明である。しかし、次の二三の断章から、彼の意図したところと挫折の結末はほぼ推測できる。

A…父上の全無垢のような心はただただ息子たちの成功と父上の幸

福を祈っておられる。そのお気持ちはよく理解できる。でも問題は僕が人生態度に全く同意できないことなのだ。（日記・同5・8、圏点はＡＢＣとも論者）

B…母上から来信。（中略）父上がまた例の病気にかかり、環境を変えるために旅に出なければならないと書いてある。心配したとおりだ。気の毒な父上！　父上に対して強情に逆らわないように、母上は懇願せんばかりだ。とても悲しい。少し勇ましく戦い過ぎたのではないだろうか。僕のために父上を殺すなんて。僕は祖母も殺しているのだ。（日記・同5・10）

C…主張と申候も大した事ニハ無之唯私の私たる所を御承認被下候様との願のミに御座候　私は到底徹頭徹尾父上様と同一の人ニハなり候事出来不申候　夫レハ天が許さゞる所と存申候（中略）私ニハ私事も秘密も御座候ハず　父上様のある様ニ思召し候は二人の間の性癖の相違が致す所か　私のつゝましき性格の致す所か　父上様の御思ひ過しの致す所か　時ニハ何故ニ父と子の間ニかくばかり隔りあるにやと我れながら恨めしく悲しく相成候事も御座候（母堂あて書簡・同5・13）

日記文Ａには、「疑いを解くつもりで（父に）返事を書いた」とある。しかし日記文Ｂによると、その「返事」と行き違いに届いた母からの書簡には、すでに父が「例の病気」にかかっていることが報じられている。「例の病気」とは、熱中すると相手の言うことが聞きとれないような錯乱状態（「私の父と母」）に陥ることをさすのであろう。彼はその原因が自分の態度あるいは主張にあったと顧みて「少し勇ましく戦い過ぎたのではないだろうか」と自問し「僕は祖母も殺しているのだ」とキリスト教入信当時の傷痕を自責している。その結果、「弱いとは思ったが」母に対して「胸中を書かざるを得な」（日記、同5・12）くなって書いたのが書簡Ｃである。この書簡は「勇ましく戦」ってはいないとしても、有島が父母にあてた書簡の中では、かなり強く自己を押し出したものになっている。

ところで「農場を投げ出す」ことはどうだったか。日記・書簡に見る限り、彼がそれを父に言った形跡はない。書簡Ｃにはまた「親の憂ゑ子の悲しむ時代ハ実ニ今の時代ニ御座候」と書き、「老親の涙を促し健康を損ふに至るを見てハ如何に身を処すべきかを迷ひ〳〵て殆んど為す所を不知候」とも訴えている。言わなかったのは農場問題ばかりではなかった。結局彼は、父を「徒らに悲しませること」、あるいはそのおそれのあることはすべて「黙ってゐることにした」、緘黙の道を選んだのである。しかも彼は父の「人生態度に全く同感できない」し、「徹頭徹尾」父と「同一の人ニハなり候事」相かなわぬのである。ここに、黙しつつ「父の死を願」いつづける「不幸の子」が出現することになった。

高山亮二氏は「親子」に描かれたような父子の葛藤の場面が実在しえぬことを論証された。これは動かぬ事実であろう。すると、あのいさかいは作者有島の内なる問答、仮想の対決ということになる。少くとも彼が脳裡にあの場面を仮構しなければ、あの作品は生まれようがなかったのだから。そこでさらに一歩を進めてみる。彼があのいさかいの場面を初めて構想したのは、あの時――父の没後数年を経、農場をもすでに解放（放棄）して新しい局面に逢着したあの時、大正一二年春だったろうか。わたくしには、とてもそうは考えられない。「親子」の父と子の間に繰りひろげられるのは、書簡Ｃに書きつけられた「親の憂ゑ子の悲しむ」姿そのものである。「子の悲し」み、つまり仮想の父に抗っていく主張の中身はおそらくさまざまに変わったであろうが、「何故ニ父と子の間ニかくばかり隔りあるにや」と「恨めしく悲しく」繰り返す脳裡の舌戦、そのまがまがしい不毛の対決は緘黙の日常を伏流する暗い情念であったに違いない。それは時に「父の死を願」う憎しみの極に振れ、また時に「血のつながりからのみ来ると思はしい熱い、然し同時に悲しい感激」の極に振れて、反抗・憎悪と諦念・共感の間を揺らぎつづけたのではないか。有島が「親子」に描いた父子の葛藤は、幾百度となく積んでは崩し、崩しては積んできた幻の論争の残影である。

わたくしはそれを、すでに喪われたものの残影であるとみる。そのまがまがしい「戦い」は父の罹病を告げられた時点で大きく変質し、農場解放（放棄）の時点（大正11年7月）で霧消したと考えるのである。「農場を投げ出」した時、父の敵性、息づまるほどの「圧迫」感はどこへともなく去って、父は「血のつながりからのみ来ると思はしい、熱い、然し同時に淋しい感激」のみの対象に過ぎなくなった。高山氏はまた、この作品を作者は「望遠鏡で自分の遠い過去を眺めるように描いている」と書き、「望遠鏡をのぞく作者がすでに、父の辛苦の農場を自由に解放したあとであり、理知的に解放の正しさを確信しても感情的に亡父に対する後ろめたさ、すまなさのあったことは十分想像される」としておられる。それを根拠としてこの作品の「歯切れの悪」さを説明されるのはうなずけないが、執筆時点の作者の胸中はまさに氏の指摘される通りであったろう。「後ろめたさ、すまなさ」のつきまとう、高山氏の髣髴される作者像はいっそう痛切に、憎悪と共感のはざまに激動した往年の「戦い」の再現、その追体験の不可能を告げていると見えるのである。

「望遠鏡で自分の遠い過去を眺め」て描かれた結果、この作品には異なる時間・異なる空間に生起展開すべき事がらがごたまぜに並べ立てられた気味がある。主人公の彼が、腹を立てなくてもよい場面で憤ったり、怒りつづけてよい場面でにわかに理解を示す、などというのもそのあらわれの一つである。結末の、「よしやり抜くぞ」

という決意は、「三十」近くの若き有島の「農場を投げ出す」決意でもなく、自立の意志表示でもないはずである。それは作品擱筆時、すなわち死の二ヵ月前の作者自身のやみくもの自己激励に過ぎなかったもの、とわたくしは考える。幻の対決の残影が消え、形骸と化した古戦場に老いた有島がいるのである。

厠に立った父の老いた後姿を見送りながら彼れも立ち上った。縁側に出て雨戸から外を眺めた。北海道の山の奥の夜は静かに深更へと深まってゐた。大きな自然の姿が遠く彼れの眼の前に拡がつてゐた。

あの激昂がまるで夢のように思いなされる「老いた父の後姿」、縁側に出てみれば深更の果てしない闇、しかし現実に戻ってみればやはりその外界に向かって踏み出していくほかはない、「やり抜」かなくてはならないのである。展望のない暗い世界――へ。たとえやみくもにでも、なお渾身の力をこめて回生をはかろうとする作者の情念だけがそこにある。

西垣勤氏は、この作品と作者の実生活のあり方の差異に注目し、彼がその最大の課題をこのような私小説としてしか書けなかったこと、またその作品を幾重もの虚構で鎧わなければリアリティが保てないものであったことをあげて、「『親子』は、彼と彼の文学の悲劇を、悲劇として完結させている」④と同じと書いた。その言葉を借りて言えば、わたくしは、農場解放（放棄）後にこうした私小説を書く羽目になったことを彼の作家としての最大の悲劇であったと考える。それは、作者の意図にかかわりなく、この作品が作者を含むだれをも傷つけず、だれをも励ますところがないからである。父の死後年月を経てのちではあっても、たとえば「落潮」に苦しみ、「作よりも先づ生活の改造」（大正11・1）と悩んでいた時期までに農場主有島がこの題材を作品にしたのであれば、それは彼みずからを含めて多くの人々を傷つけ、また励ますことのできる牙のある作品たり得たことと思われる。その時この作品はシチュエーションもプロットも大きな変更を迫られることになったであろうし、第二の「カインの末裔」を誕生させる契機となり得たかもしれないのである。

注①　『有島武郎全集』第6巻（昭和55・12・20　筑摩書房）。以下、未刊分を除き本全集各巻をテキストとして用いる。

②　外尾登志美「『親子』―有島武郎の挽歌」（昭和55・10「日本近代文学」27集）。

③　西垣　勤「過去をどうみつめるかについて―有島武郎ノートⅡ」（昭和42・1「黄塵」2号、のち『白樺派作家論』〈昭和56・4・1　有精堂出版〉に収録）。

④　同「有島武郎、その青春」（昭和38・1「クロノス」3号、のち『有島武郎論』〈昭和46・6・10　有精堂出版〉に収録）。この点について氏は注③の文で「農場以外のこととしか考えられない位で、あいまいという他はない」と「農場問題」の方へ修正している。

⑤ 高山亮二「有島武郎晩年の一問題―小説『親子』の成立をめぐって」（昭和44・7「北方文芸」）。氏は引続き、B「家とのたたかい―有島武郎『親子』再論」（昭和48・7、同）C「有島武郎『親子』論・補遺―その位置づけを巡って」（昭和58・3、同）を書いている。
⑥ 山田昭夫『親子』（昭和49・3「文庫」4号〈同紙未見〉、のち『有島武郎の世界』〈昭和53・11・10　北海道新聞社〉に収録）。
⑦ 福本彰『『親子』論への一里程標」（安川定男・上杉省和編『作品論有島武郎』昭和56・6・20　双文社出版）。
⑧ 山田昭夫『有島武郎』（昭和41・1・15　明治書院、のち『有島武郎・姿勢と軌跡』〈昭和48・9・25右文書院〉に収録）。
⑨ ――「文壇諸家年譜㉖　有島武郎」（大正7・3「新潮」）。
⑩ 上杉省和「有島武郎のキリスト教入信とその周辺―新資料による覚え書き」（昭和40・9「国語国文研究」31号、のち『日本文学研究資料叢書白樺派文学』〈昭和49・8・10有精堂出版〉に収録）。
⑪ 山田昭夫「有島武郎の人と作品」（昭和58・7・25『鑑賞日本現代文学10　有島武郎』角川書店）。
⑫ 武田勝彦編「〈未発表書簡〉有島武郎・英文書簡八通」（昭和48・4「文学」）。
⑬ 鎚田研一「親子解説」（『解説　有島武郎創作全集』第5巻　昭和14・9・9新潮社、のち『日本の文学者』〈昭和21・9・30全国書房〉に収録）
⑭ 有島が農場問題について父との対立を深めていく時期が明治41年春以降であることは、市川三枝子が指摘している。（「思想と生活の一元化―有島武郎の小説『親子』に関するノート」（昭和30・1「北大季刊」7号）。

〔付記〕 小稿は、「『カインの末裔』成立過程　試論」（昭和42・3「同志社国文学」2号）で「親子」に触れた部分（とくに「親子」の題材となった事件が実在したと考えていた点）と相違している。不明をわびて小稿のように訂正させていただく。また「カインの末裔」の成立過程についても、小稿の線上で補正したい。